



Title	心理臨床におけるイメージ：主にユング心理学の立場から
Author(s)	松下, 姫歌
Citation	若手イメージ研究者のためのブラッシュアップセミナー（Brush up seminar for young researchers on mental imagery）. 2013年3月16日（土）～17日（日）. 北海道大学学術交流会館, 札幌市., 14-14
Issue Date	2013-03-14
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/52523">http://hdl.handle.net/2115/52523</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	proceedings
File Information	matsushita.pdf



[Instructions for use](#)

## 心理臨床におけるイメージ —主にユング心理学の立場から—

松下姫歌 (京都大学)

### 概要

心理臨床の主な仕事として心理療法と心理査定があげられます。心理療法はクライアントが心の次元で自分をつかんでいくことを支援するものです。その際の軸足をどこに置くか、心をどの範囲で扱うか等により、様々な学派があります。心理査定はクライアントの抱える心の問題や治療可能性についてアセスメントする作業で、基本的に心理面接を通じて、必要に応じ心理検査を用いておこないます。今回は「イメージの心理学」と呼ばれる、ユング心理学の立場から、心理臨床におけるイメージについて、お話したいと思います。

心が何かを体験する時、そこには必ず、イメージが働いています。ユング心理学においては、心の体験に伴うあらゆる表現を「イメージ」の現れと捉えます。夢や描画、箱庭、プレイ等の表現はもちろん、クライアントの語り全てや、心が生み出す症状や問題となる行動もイメージの現れとして捉えます。視覚的イメージだけでなく、聴覚的、触覚的イメージ等、様々な五感のイメージも含まれます。明確なものから漠然としたものまで含みます。また、その時点では明確に意識されていないけれども、その人の行動を無自覚のうちに支配している、無意識水準のイメージも含まれます。

加えて、ユング心理学の特徴としては、イメージを何等かの心的内容を隠蔽するための“置き換え”としてのみ捉えるのではなく、そのイメージは、“心にとってまだ未知なもの”について、“心がキャッチし感受したもの全てが凝縮された、その時点では心にとって最もよく表現されたもの”として捉える点があげられます。つまり、心の視点が沢山含まれた、多面的で多次元的な表現として考えています。したがって、イメージを何か他の意味に置き換えて終うのではなく、イメージに向き合い、いわば、イメージと対話していくことで、イメージの中に入っているものを様々な次元で体験し、捉えなおしていくことが作業の中心となります。それは、イメージ、すなわち、心が無自覚のうちに捉えかけていたものに心を向き合わせ、心がキャッチしようとしているものを探求し捉えていく作業です。イメージの中に深く入っていくとともに、イメージをメタな視点からも捉えていく作業が進むごとに、イメージそのものが変容し、心の捉え方が変化していきます。それは、“かつて忌避していたもの”あるいは“まだ自分の中に見出せていなかった可能性”の新しい顔を見出すことであり、それらと自分との新しい関係を見出すこと、それらと関係をもつ自分を見出すことを通して自分の本質をつかむことと言えます。

当日は、具体的な例をいくつか提示しながらお話したいと思います。